

ボランティア・市民活動のコーディネーター・リーダー等推進者のための

ボランティア情報

NO.518
2020
月号



写真右側が宮本さん



福祉教育



今回の実践者

和歌山県有田市社会福祉協議会
上席主任/社会福祉士
みやもと ともこ
宮本 朋子さん

教員に寄り添い、地域の大人の
変化を実感する福祉教育

全国で活躍する「全
社協全国福祉教育推
進員研修」修了生の
実践を紹介します。

和歌山県有田市社協は、2013年に地域福祉活動計画を策定し、同年から「福祉の種まきプロジェクト」による福祉教育を推進しています。担当の宮本朋子さんは、自らもPTA役員として学校と地域の関わり大切さを校長に伝え、徐々に市内の学校と社協との関係を広げられました。

現在、宮本さんは和歌山県社協の福祉教育検討メンバーとして活動しています。また、宮本さんが講師となった県教育委員会のコミュニティスクール研修では、参加者である県内の学校教頭に、地域の引きこもりや不登校の現状と、子どもを支える地域の仕組みづくりの必要性を話しました。宮本さんは「学校と社協が地域の課題解決と一緒に考え、地域の将来に向けて取り組んでいきましょう」と呼びかけ、その後、県内の学校関係者の研修では福祉的視点を含めた分科会が設けられる変化も生じています。

新型コロナウイルスによる学校休校で、今後は授業遅れの回復を優先します。そのなかでも宮本さんは、「子どもたちが感じたことを受け止め、コロナ禍で地域に暮らす高齢者・障がいのある方、医療介護従事者や大学生などさまざまな立場の方が、どのような困難を抱えているのか、ICTも活用したプログラムを作りました。地域の現状理解と解決を考えるプログラムを学校に提案し、具体化できそうです」と語ります。

有田市で生まれ育ち、住みやすい地域づくりの情熱を持つ宮本さん。これまでの福祉教育実践を通じて、「子どもの変化はもとより、一緒に関わる大人の変化が大きいことを実感しています」と振り返ります。子どもたちと関わるのが面倒と言っていた大人、関心のなかった大人が、地域で学ぶ子どもたちの姿を通じて、子どもたちや地域との関わりを築こうと変わります。宮本さんは、「昨年の福祉教育推進者研修でも学んだ『共に生きる力を育む福祉教育を大切に、子どもを中心に地域の取り組みを進めていきたい』と語ってくれました。

CONTENTS

02 - 05

特集

ボランティアの絆をつなぎ続ける(2)

～身体的距離を保たざるを得ないなかでの取り組み～

06 ・企業の子カラ
青森県つがる市「おかず屋」
～地域に暮らす人々自身が生み出した事業が、
地域に欠かせない存在に発展～

07 ・コーディネートの
「チカラ・ワザ」を磨く!

08 ・大学ボランティアセンターだより
～若い力を地域につなぐ～
・保険のひろば

特集

ボランティアの絆をつなぎ続ける(2)

～身体的距離を保たざるを得ないなかでの取り組み～

今回の特集は、前回に引き続き「ボランティアの絆をつなぎ続ける～社会的距離を保たざるを得ないなかでの取り組み～」がテーマです。これまでに経験がない社会活動の制限が継続し、ボランティア・市民活動実践が十分な力を発揮できない状況にあるなかで、つながりを途切れさせず、支援を必要としている人と新たにつなごうとする活動、そして新型コロナウイルス感染症終息後を見ずえ、地域との新たなつながりを築こうとしている取り組みを紹介します。(※紹介事例は5月下旬に電話取材)

事例1

地域と築いたつながりを絶やさず、次に進む仕掛けづくり

～Inappy SAKURA PROJECT～

(長野県・伊那市社会福祉協議会)



伊那市社会福祉協議会
地域福祉課 地域福祉係
地域福祉コーディネーター 新美 亮介さん

担当の新美さん(右)と原さん(左)

長野県伊那市には我が国有数の桜の名所、高遠城址公園があります。伊那市社協では、市民から寄せられた写真を桜の花びらにして来年の福祉まつりに飾ることで、現在の感染症対策下での人々の思いを忘れず、次年度につなげていく「Inappy SAKURA PROJECT」に取り組んでいます。

ホームページ、Facebook、Twitterは、
Inappy SAKURA PROJECT で検索



伊那市社協のキャラクター
『あいなちゃん』

新たなつながりをつくる

伊那市社協では、毎年9月、誰もが参加・交流できる福祉まつり「ふれあい広場」(以下、広場)を開催しています。「共に生きる福祉のまちづくり」を掲げて5月から実行委員会による準備を進め、当日は1,000名以上が参加します。

しかし感染症拡大防止のため、今年の開催を中止しました。伊那市社協の地域福祉コーディネーターで、広場担当でもある新美亮介さんは、「広場を通じて築いてきた住民やボランティアとの関係をどのようにつなぎ続けるか、職員で議論しました」と話します。そして、対面での交流ができないなかで、広場の理念である「共に生きる」を具体化し、市民一人ひとりの思いを形に表すことを目的に、「Inappy SAKURA PROJECT」(Inappy=「伊那happy」の造語/以下「サクラプロジェクト」)を企画しました。

プロジェクトの仕組みは、SNS(ソーシャルネットワーキングサービス)に、#(ハッシュタグ)Inappy を付けて、「幸せ」「好き」「楽しい」写真を投稿してもらうものです。寄せられた写真を花びらとして貼り合わせて満開の桜

を作り、市民のつながりを絶やさないシンボルとして市役所に掲示します。そして、来年9月に開催するひろばにも展示します。新美さんは、「サクラプロジェクトで最も大切にしたいのは、人々のプラスの感情を表現することです」と説明します。

地域共生社会への発展をめざして

一方、これまでの地域でのつながりを活かした働きかけも続けています。例年広場の開催については、4月から市内の関係団体・ボランティアの皆さんに案内チラシを配布していますが、今年は、サクラプロジェクトへの協力を呼びかけるチラシを配り、形を変えたつながりづくりを進めています。

新美さんは、新たなつながりの例として「市内で補聴器を扱う店舗に協力いただき、来年は広場に参加したいとの申し出をいただきました」と話します。また、市内の保育所の協力も得られることになりました。保育所の子どもたちも写真でサクラプロジェクトに参加でき、子どもたちの想いも多くの市民の方に知っていただくこと、保護者と社協との新たな関係が生まれることをめざし、新美さんは保育所で6月中旬に予定して

る撮影会の準備を進めています。

現在伊那市社協は、地域共生社会の実現をめざして、昨年からの市民・行政と三者協働で研究チームを設置し会合を続けています。今後、伊那市の地域共生社会づくりに向けたスローガンを決め、プログラム開発にも取り組む予定です。新美さんは「サクラプロジェクトで築いた新たな関係や、寄せられたメッセージも参考としながら、『共に生きる』ことの具体化に取り組んでいきたいです」と、今後への思いを話してくれました。



市民にサクラプロジェクトへの参加を呼びかけるチラシ



Facebookには市民の皆さんも登場

事例2 毎日開催する子ども食堂、これまで以上に求められるボランティアの力 (東京都江戸川区・NPO法人らいおんはーと)



東京都江戸川区 NPO法人
らいおんはーと
理事長

おいかわ
及川 信之 さん

東京都江戸川区内で子ども食堂や学習支援に取り組み、2年前にNPO法人を取得した「らいおんはーと」。活動の中心は、月に数回開催する地域のどの子どもたちも受け入れるオープン型の子ども食堂と、支援が必要な子どもたちを中心にクローズ型で365日休みなく開催する食事提供と居場所・学習支援です。現在、新型コロナウイルス感染症防止のため、支援範囲を絞って活動を継続しています。

ホームページ <https://npo-lh.com/>

NPO らいおんはーと で検索

地域のネットワークを活かして活動

らいおんはーと理事長の及川信之さんは、地域の小・中学校PTA会長を5年務めました。「保護者の集まり(おやじの会)がきっかけでした」と振り返る及川さんは、PTA活動を通じていじめや不登校、虐待やDV、ひとり親家庭の困窮など地域の子どもの置かれている厳しい状況に接し、保護者や民生委員・児童委員、保護司等とのネットワークで支援を行ってきました。その後、継続した支援のため地元企業の支援も得てNPO法人らいおんはーとを設立し、及川さんはそれまでの勤務先を退職し常勤職員となりました。

現在、らいおんはーとはオープン型の子ども食堂を区内の複数会場で開催し、毎回約60人の子どもが集います。会場のひとつは、区内の社会福祉法人が協力しています。また、クローズ型により、毎日朝ごはんを提供する子ども食堂を事務所で開催し、同時に居場所提供と学習支援も行っています。

コロナ禍のなかで子どもを支える

らいおんはーとは、コロナ禍のなかで、クローズ型の食堂でつながる子どもたちを中心に、土・日も含めて昼食を提供する「毎日お昼ごはん食堂」を、学校給食が再開されるまで実施することにしました。

及川さんは、「事前申込み・先着順で実施しています。希望しながら定員を超えたことで参加できなかった子どもは、その日の夜に保護者に連絡して子どもと家庭の様子を聞きます」と、期待に応えられない難しさと配慮について話します。また、すべての保護者とLINEグ

ループ(参加者全員が情報を共有できる機能)でつながり、情報提供や活動のフォローができるようにしています。

現在、なるべく大人の出入りを少なくするためボランティアの活動を休止していますが、子ども食堂の開催にあわせてボランティアがデザートを持ってきてくれるなどのつながりが続いています。及川さんは、「ボランティアの皆さんとも全員LINEグループでつながっています。毎日ボランティアに活動を発信・共有して、つながりを切らさないようにしています」と語ります。

子どもがほっとできる場を提供する

利用する子どもたちはひとり親家庭も多く、保護者が一人で感染症への心配を抱え、子どもに手洗いやマスク着用の徹底を厳しく諭してしまう状況も見られるなか、及川さんは、毎日お昼ごはん食堂を「子どもにとって息苦しくなく、食べて笑ってもらうことを第一に考えました」と話します。子どもには手洗い等最低限の予防を伝え、及川さんたちは1日4回会場の消毒を行うなど、子どもたちの陰で感染防止の努力を続けています。

また毎日お昼ごはん食堂では、子どもの感染防止意識を高める取り組みとして子どもたちに感染予防のポスターを描いてもらいました。すると、子どもたちは「なぜ3密を避ける必要があるのか」を自らで考え、感染予防を意識し始めたそうです。

毎日お昼ごはん食堂は、子どもたちも調理に参加します。及川さんはオリジナルの「卵焼き検定」を実施し、これまで

に5人の子どもたちが合格しました。及川さんは「卵焼きは料理の基本です。卵焼きができるようになると、子どもたちは料理のレパートリーを広げます。次はカレー検定の準備を進めています(笑)」と、子どもが主体的に参加できるような仕組みを工夫しています。

今後必要になるボランティアの力

及川さんは、「学校休校で、とくに厳しい家庭環境や経済状況にある子どもたちの学習環境が保証されていないことが懸念されます。子どもたちの学力差が広がらないよう、これから学習支援に力を入れるために、これまで以上にボランティアの支援が必要です」と説明します。

学習支援には、これまでも高校生、大学生がボランティアとして関わってきました。及川さんは、「学習支援を始められるようになったら『ボランティアの皆さんにこれをお願いしよう』との構想を、ボランティアの皆さんとLINEグループで共有しながら考え、学習支援の準備を進めています」と、ボランティアへの期待を語ってくれました。



子どもたちが一定の距離を保ちながらお昼ごはんを食べる



子ども自身が考え描いた感染予防ポスター

事例3

「言えるは癒える」を合言葉に、WEBを活かし当事者同士の
語らいの場を続ける

(滋賀県甲賀市・ぶれぶれママパパサロン)

ぶれぶれママパパサロン
代表北田 麗子 さん
(写真右)

副代表

歯黒 あずささん

「ぶれぶれママパパサロン」(以下、サロン)は、妊活や不妊治療により子どもを授かること、また、授かってからの妊娠継続の困難さを当事者同士が語り合う場として、昨年秋から準備を進め今年2月に初めて開催しました。現在、感染症拡大防止のため3月には開催を中止し、インターネットを活用した新たな居場所づくりに挑んでいます。

ホームページ <https://ameblo.jp/prepremamapapasalon/>

ぶれぶれママパパサロン で検索

当事者の思いを共有したい

代表の北田麗子さんと副代表の歯黒あずささんは、同じ地域に暮らし市の子育て支援センターで出会いました。北田さんは自衛官の経験を経て現在は地域名産のお茶を生産しており、歯黒さんは障害者施設の看護師です。二人は不妊治療・切迫早流産治療の経験を通じて、当事者の思いを共有する場の必要性を感じていました。北田さんは「癒されて前向きに生きていくための息抜きや、抱えている思いを出せる居場所を作りたいと考えていました」と振り返ります。

歯黒さんが甲賀市社協VCにサロンの構想を話したところ、社協VC職員から使える助成金の案内を受けました。甲賀市共同募金委員会が滋賀県共同募金会と実施している「笑顔つなげるミライ助成」への応募を勧められたのです。その後市民も参加する審査委員会を経て助成金を活用できるようになりました。北田さんは「助成があることで、サロンの運営費用を心配することなく取り組むことができました」と話します。

軌道に乗せようと取り組んだ時に

昨年秋からサロンの準備を進め、今年2月に第1回のサロンを市内の公共施設で開催しました。北田さんと歯黒さんは、二人の経験をふまえお互いに役割分担をして相談に応じています。歯黒さんは「サロンを開催して、あらためて参加者のもやもやした思いや、せっぱ詰まった気持ちを感じました」と話します。また男性の参加者からは、「サロンができたことで、妻が自分に

話せなかったことを話せる場と話せる仲間を得ることができて良かった」との声も寄せられました。しかし、3月の第2回サロンは感染症拡大防止のため中止せざるを得なくなりました。

WEBサロンにチャレンジ

今後の活動を模索するなかで、歯黒さんは北田さんにWEBによるサロン開催を提案しました。歯黒さんが受講していた心理学講座がWEBによるオンライン授業を行っており、WEB開催に具体的なイメージを持つことができました。一方北田さんは「すぐにはWEB開催のイメージが湧きませんでした。が、せっかく助成金を得たのに何もできなかったではもったいないので(笑)」と、チャレンジすることにしました。WEB会議の経験がない参加者には事前のサポートも行いました。

WEBサロンを開催してみると、想像していたよりも違和感がないことがわかりました。WEB会議では議論を交わすタイミングをつかみづらい場面がありますが、サロンの目的は当事者の思いを参加者同士が共有することなので、一人が話す間は他の参加者が話を聞き、話を終えたところで次の会話が自然に始まります。そのため、WEBでも一人ひとりの話をしっかり聞くことができます。

感染症が拡大した4月初め、日本生殖医学会は感染時の治療の懸念から不妊治療の延期を検討する声明を発表するなど、当事者の不安が生じる動きもありました。北田さんは「自粛生活が続くなかで、自宅に籠ってしまった参加者さんたちが、WEBサロンで

『やっと家族以外と話せた』と喜ぶ姿が印象的でした」と話します。

妊婦や不妊治療を受けている人々は、感染への恐怖を持っています。そのため北田さん、歯黒さんは、しばらくの間はWEBによるサロン運営を重ねながら、参加者の心の悩みを表に出せる場にしたいと考えています。

偏見や差別をなくしたい

北田さんは、「現在、不妊治療は誰もが向き合う可能性があるとの社会的理解も進んでいます。いずれは当事者の立場から医療や教育の課題も社会に発信して、不妊治療や妊娠をめぐる偏見や差別をなくしていきたい」と話します。また歯黒さんは、「切迫早流産による長期入院の経験を通じて、当事者を支えるとともに社会の理解を得る大切さを痛感しました。引き続き当事者同士の交流と社会への発信に取り組みたい」と考えています。

歯黒さんは社協VCで夏のボランティア体験に参加した経験があります。これからの社協VCに「若い世代、特に学生の心を掴むボランティア参加の仕組みがあると良いですね。若い人々の参加が地域を変え、多くの活動を創る力になると思います」と期待を寄せてくれました。



WEBサロン開催の様子



WEBサロン開催案内チラシ



参考資料

「新型コロナウイルス感染拡大下における災害ボランティアセンターの設置・運営等について～全社協VCの考え方～」(2020年6月) 現在の状況で一定規模の災害が発生し、被災した人々への支援が必要な状況が生じた際の災害VC設置・運営等の考え方についてまとめたもの。

(詳細は「被災地支援・災害ボランティア情報」で検索)



募集！つなぎ、つながる各地の実践

～全国のボランティア・市民活動、地域福祉関係者による、「未来の豊かな“つながり”のための全国アクション」開始！～

テーマは「つながろう、未来の“つながり”のために」

新型コロナウイルスの感染拡大により、接触機会が制限されるなか、地域でのつながりづくりに取り組んできたボランティア・市民活動や生活支援の取り組みにも大きな影響が及んでいます。しかしこうした状況のなかでも、日頃から築いてきた地域のつながりを途切れさせない活動を工夫したり、生活困窮や孤立によりつながりからこぼれてしまう人たちと、新たなつながりを築き取り組みが全国各地で進められています。

そこで、ボランティア・市民活動の推進、また地域で生活支援に関わってきた全国団体が協働して、WEBの活用や感染防止策を講じながら活動する方法や工夫を集め、情報発信するとともに、活動者間の交流を図り、全国の実践を後押しすることを目的に、「未来の豊かな“つながり”のための全国アクション」(以下、全国アクション)を開始しました。

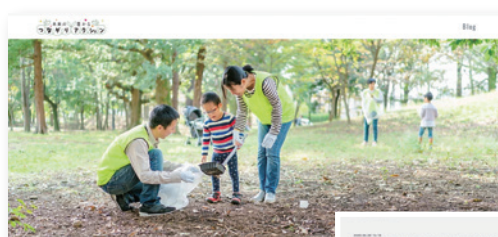
各地のさまざまな活動事例を紹介！

全国アクションのホームページでは、各地のさまざまな実践を紹介していますので、ぜひご覧いただき皆さんの地域の実践の参考としてください。

あわせて、皆さんの地域で工夫を進

ながらボランティア・市民活動のつながりを保ち続ける実践、また新たな方法でつながりを築いている実践をぜひご紹介ください。

未来の豊かなつながりを築くため、皆さんのご協力をお願いいたします。



三重県のNPOの取り組み



阪南市社協の取り組み



コープこうべの取り組み



西伊豆町社協の取り組み

全国アクションホームページ

<https://www.tunagari-action.jp>

「つながり全国アクション」で検索

すでに多くの実践や留意点が紹介されています

都道府県・指定都市社協及びボランティア・市民活動センターでは、各地域の実践を紹介したり、活動を進める上での留意点をWEBで紹介しています。

参考にご覧ください。

「集まれなくてもつながる方法 – “密”を避けながら今できること・これからのこと–

(大阪市社会福祉協議会)

大阪市社会福祉協議会(担当:地域福祉課)では、つながりが途切れることなく、お互いの暮らしを気にかかけ合い、見守ることができ一助となるよう、さまざまな活動に関わ

る方に向けて「集まれなくてもつながる方法」をまとめ、WEBで紹介しています。

<https://www.osaka-sishakyo.jp/fukusinatorikumi/20200501-5>

大阪市社協 集まれなくても で検索



「新型コロナの中でのボランティア・市民活動 参考事例集」

(東京ボランティア・市民活動センター)

東京ボランティア・市民活動センターが実施した調査では、多くのボランティア・市民活動団体が感染拡大に配慮しつつ創意工夫を行い、取り組んでいることが分かりました。

それらの取り組みをまとめ、WEBで公開しています。

<https://www.tvac.or.jp/corona/jireisyu/>

TVAC 新型コロナ 事例集 で検索



「“3密”を避けながら、つながりを絶やさない! 地域福祉活動つながるポイント」

(広島県社会福祉協議会)

感染防止や健康管理に留意しながら、地域のつながりを絶やさない取り組みを「つながるポイント」としてまとめ、「3密」を避けながら孤立をできる限り防ぐ実践をニュースレ

ターにまとめ、WEBで公開しています。

<https://www.hiroshima-fukushi.net/category/mission/>

広島県社協 県内の地域福祉情報 で検索



企業のチカラ

さらなるボランティア・市民活動発展へのカギ

CSRやCSVの推進が課題となるなか、企業によるボランティア活動に注目が集まっています。企業とボランティア・市民活動にはどのような接点があり、その意義はどこにあるのでしょうか。本コーナーでは、具体的な取り組みを紹介しつつ、企業によるボランティア活動の可能性と新たに生み出され得る社会的な価値について探っていきます。

第35回 青森県つがる市「おかず屋」～地域に暮らす人々自身が生み出した事業が、地域に欠かせない存在に発展～



企業概要 (2020年6月現在)

創 業：2003(平成15)年
メンバー：6人

2000(平成12)年、当時の稲垣村(現つがる市)のJA女性部メンバー5人が高齢者の昼食を提供したのが事業の始まり。その後、地域住民からの信頼を得て注文が増加したことから、2003(平成15)年「おかず屋」として開業し、惣菜と弁当の調理・販売を始めた。現在、土・日も含めてすべての曜日に対応し、弁当・惣菜の注文を受け製造・配達を行っている(日曜の販売は休み)。

生活改善の取り組みから起業

「おかず屋」は、ホームページもなく、電話帳にも掲載をしていない地域住民を対象とした配達専門の惣菜・弁当店です。毎日800食以上を一つの事業所で調製し、地域の企業や消防署、デイサービス事業所等に配達するとともに、地域住民からの個別の注文にも応じ、配達しています。

代表の中村嘉子さんは、女性の視点から農業振興と地域生活を充実させる活動に取り組み、現在、つがる市生活改善グループ連絡協議会会長も務めています。中村さんは、「地域の高齢者に喜んでもらえる事業ができないか」と考え、2000(平成12)年に惣菜の調製・配達事業を始めました。中村さんは、「緻密な計画を立てて事業を始めたわけではありませんでしたが、自分たちが食べたいと思う惣菜を1パック100円で販売し始めました」と振り返ります。当初のメニューは数種類と簡素でした。

地域になくはない事業に

最初は地域の福祉センターやJAへの配達を中心でしたが、事業を軌道に乗せるため地域の事業所を訪問して得意先を開拓する努力を続けました。また、地産地消をモットーに地元の農産物が

中心の食材で調製された惣菜・弁当の評判が地域住民に口コミで伝わり、徐々に顧客が増えていきました。「土・日も惣菜・弁当がほしい」との要望に応えるなど、地域住民のニーズに沿った細やかな対応を進めてきました。現在は110円の惣菜に加えて300円～700円のお弁当の種類も用意しており、注文者の要望により、1,000円～2,500円の弁当を調製することもあります。

2006(平成18)年からは市社協及び市の地域包括支援センターが実施する、65歳以上の一人暮らし高齢者、高齢者・障害者世帯への配食サービスの一部として、週3回、1日10名程度の昼食弁当をおかず屋が配達しています。あわせて市社協と見守り協定を締結し、配達時に安否確認も実施しています。

中村さんは、一人暮らし高齢者宅への配達時の出来事として「配達にうかがうと、高齢者が家の奥から『今日はちょっと具合が良くないので玄関に行けないから、弁当を玄関に置いておいて』と言われました。この時は弁当配達の帰りにあらためて立ち寄って直接お会いし、無事を確認しました」と、弁当の配達を通じた見守りの様子を話します。

メンバー同士が配慮しながら事業を継続

中村さんは事業継続のポイントについて「私を含めおかず屋のメンバーは高齢なので、予期せぬ入院で長期間休むこともあります。また、家族の介護でフルタイムの勤務が難しい場合もあります。それらをやりくりしながら対応してきました」と語り、家庭の状況を大切にしながら柔軟な働き方を大切にしています。また、おかず屋メンバーは農家の主婦の

ため、給与は扶養控除の範囲内になるように調整しながら就業しています。中村さんは「毎月の収入やメンバーの給与計算が大変です(笑)」と話します。

地域で暮らし地域に貢献する

惣菜・弁当の配達は、メンバーの自家用車計5台で行います。津軽地域の冬は地吹雪となる時もあり、惣菜・弁当の配達には困難がともないます。おかず屋では、これまで1回だけ地吹雪で配達ができなかったことがあるそうです。中村さんは、「弁当を待っていてくれた人に配達できなかったことが、今までで一番悔しい思い出です」と振り返ります。一方、これまでの事業で食中毒を起こしていないことが誇りです。夏はメンバー各自の保冷箱に重い保冷材を入れるなどの苦労がともないますが、常に衛生面に配慮して事業を進めています。

おかず屋の事業は、農林水産省が後援し地域の特産物を活用した地域づくり活動を表彰する「食アメニティコンテスト」(東京)において、2015(平成27)年度審査会特別賞を受賞しました。また中村さんは、2017(平成29)年度青森県いきいき男女共同参画社会づくり表彰女性のチャレンジ賞を受賞するなど、生活者の視点での継続した活動に対して多くの評価がされています。

中村さんは、「催事では多くの注文を受けることもあり、期待に応えるのは大変な面もありますが、地域の皆さんに『美味しかった』と言ってもらえることがやりがいです。気の知れたメンバー同士、自然体で楽しくやっています」と話し、今後も地域に喜ばれる事業を継続していきたいと語ってくれました。



「水害にあったときに～浸水被害からの生活再建の手引き～」(震災がつなぐ全国ネットワーク)

水害にあった災害被災者の生活再建の支援を目的に、過去の水害被災地での支援経験をもとに作成。内容を補完する「水害後の家屋への適切な対応」も含めてWEBからダウンロード可能。

(詳細は「震災がつなぐ全国ネットワーク」で検索)



参考資料



今、ボランティアセンター担当者にとって大切なコーディネート力。企業との連携、福祉教育の推進、そして災害ボランティアなど、地域の課題に協働で取り組むため、コーディネートが重要になっています。ボランティアセンター担当者が押さえるべきコーディネートのポイントを連載で紹介します。

NPO法人ハズオン埼玉
常務理事

にしかわ ただし
西川 正 さん

学童指導員、出版社等を経て、2005年ハズオン埼玉を設立。「おとうさんのヤキモタイム」「翔んでさいたマスク」キャンペーンをはじめ、さまざまな市民参加型企画プロデュースに関わる一方、まちづくりや子育て支援の研修等の講師やファシリテーターとして活動。PTA、民生委員など地元での活動多数。元清泉女子学園大学特任准教授。今年3月末までNPO法人日本ボランティアコーディネーター協会理事。著書に『あそびの生まれる場所〜お客様時代の公共マネジメント』（ころから刊）。

第4回 図解! 「やってみたい(「自発性」)」の正体を探ってみた

「はい、中学生〜! こっちの椅子を運んで〜」

私の住む団地は高齢化率が50%に近く、夏祭りのお神輿も担ぎ手がいません。そこで中学校に「ボランティア」という名の動員を依頼。なので朝、現地に来た中学生くんたちのやる気は…。他方、運営はといえば、作業の中身がすべてあらかじめ決まっておき、結果、冒頭のセリフのような指示語が飛び交いがちです。地縁の活動ではこんな風景をよく見ます。

中学生の「おもしろかった!」の理由

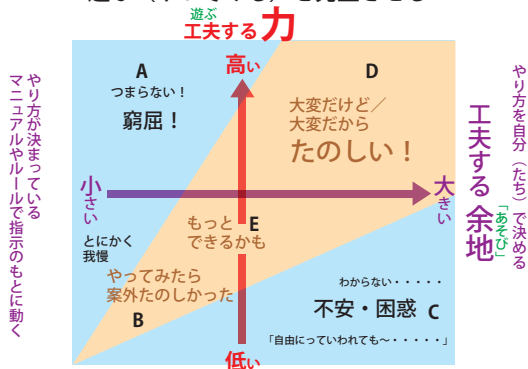
少し前、多文化交流がテーマのイベントを開催しました。地元に住む外国ルーツの方々(PTAのお母さんなど)に民族料理のお店を出店してもらって、「地元にいるんな人が住んでくれてよかった」を味覚から感じてもらおうというものです。私が担当したコーナーは、五輪ならぬ「七輪ピック」。お客さんに七輪で自分でおせんべいを焼いてもらい、世界各国のディップ(メキシコの辛いタコスソース、リトアニアのマヨネーズ…)を自由につけて食べてもらおうという企画です。3人の中学生が「七輪ピック」担当で来てくれました。朝、自己紹介のあと、このコーナーのねらいを伝えます。「せんべいを売るっていうより、とにかくお客さんと楽しい時間をつくりたいのね。やり方はみんなにまかせるから、失敗してもいいので、やってみて〜。困ったことがあったらいつでも相談してね」。

3人は、最初こそとても硬い表情で、「まかされても〜」ととまどい気味。それでも、お客さんから「これはどこの国のもの?」と聞かれると、瓶の前に国名を書いた札をつくって置いたり、「このメキシコの辛いディップ、案外せんべいにあうわよ」と聞くと、その感想をポップに書いて貼り付けたり。団地のおばちゃんたちとやりとりをしながら工夫を重ねるうち、「世界のディップつけてみよう!」と自作の看板をつくり、

お客さんにおすすめを語っていました。夕方、感想を聞くと、満面の笑みで「たくさんの方に声をかけてもらって、おもしろかったです! またやりたい!」。

きっかけは動員でも、そこに「安心」と「工夫の余地」があれば、「やってみよう」(自発性)が生まれてきます。「言われたとおり、決まったとおり(前年どおり)」ではなにも生まれません。また、逆に何も決まっていなさすぎて、人は立ちすくみます。これを図にしてみました。

ちょうどいい「余地」があることが遊ぶ(やってみる)を発生させる



「おもしろい」の正体とは?

その人(または組織)に工夫する力があれば、ルールやきまりごとは少なく、工夫の余地が大きいほうが「楽しい」になりやすい(D)。しばらく窮屈だと不満が出る(A)。しかし、持っている力以上に求められると、「どうしていいかわからない」=「不安で動きが止まる」(C)。その「ちょうどいい」を狙って、活動(プログラム)を準備(図の左に移動する)すると、「これならやってみよう」との気持ちになります(C→B)。

人は、「やってみたら案外おもしろかった」や、「もっとやってみよう」、そして「できるかも」となります(B→E)。一足飛びが無理なら、小さなステップを用意すると、「やってみる」と「できた」の両方が体験でき、それが「もっとできるかも」につながります。ただし「やってみる」のなかには、必ず「うまくいかない」失敗が含まれます。その失敗を許容

し(待ち)、不安や疑問に応える、すなわち安心を保障すると人は自ら動き出します。結果のわからないことをやってみるというドキドキが、「おもしろい」の正体です。

次の担い手が見つかる組織とは

被災地などで、ボランティアセンター(ボラセン)が整備され、ルールやしきみをつくると多くの人がかかわることができます。しかし、あらかじめ決まっていることばかりになると、自発的な動きは減っていきます。かつて大学生は、勝手に自分の興味にあわせて、地域に飛び込んでいきました(その分、大きな失敗も)。今は、地域に出ることを怖く感じる学生が多数。そこで、大学にボラセンが必要になります。その学生にとっては、いきなり(D)ねらいがいいのか、それとも(B)からがいいのか、を見極めつつ、活動先を探したり、自らプログラムを企画したりしているはず。また、団体側でこのことを気にしてくれる人(コーディネーター)がいれば、多様な学生が送り出せます。

地域には、地域のために自分が動くことが大好きな人はたくさんいます。しかし、上手に他人に仕事(工夫の余地)を残しておく人は少ないです。地縁系の活動が世代交代しにくいのは、このためです。地域は「正しさ」が先に立ちがちですが、同時に「楽しさ、おもしろさ」に気を配ることが、メンバーの自発性を膨らませます。自分が体験しておもしろかったら、友達を誘ってくれます。今やっている人(役員さん)が楽しくやれているかどうか、次の担い手が生まれるかどうかを決めるのではないのでしょうか。





ボランティアセンターだより ～若い力を地域につなぐ～

Vol 4

群馬県 高崎健康福祉大学 ボランティア・市民活動支援センター (VSC)

ボランティアコーディネーター

<https://mimasaka.jp/facility/institution/volunteer/>

健大ボラセン

で検索

よしざわ みちこ
吉澤 道子 さん

学生らしい気づきや若い力を活かした発想の活動が、ボランティア・市民活動の新たな可能性を広げています。大学ボラセンの「今」を紹介します。

コミュニケーション力を磨く絶好の機会

私たちの大学は、学生の学びと成長を促すとともに、卒業後に求められる社会人基礎力を養うために、ボランティア活動や社会貢献活動を推奨しています。本学VSCも、ボランティア活動が専門職養成と地域貢献の機会となるよう、教員と連携して学生の学びや関心に沿った活動をコーディネートし、近隣の施設や地域住民との関係を築いてきました。最近では、小児病棟の患児との交流や2年前に新設した農学部生向けの援農ボランティア活動など専門性を活かせるような活動を企画し、参加を促しています。

さらに、VSCの活動をサポートする有志の学生スタッフ(委員会)が、自主企画として学生へのボランティア説明や同行支援など学生と活動先をつなげる活動の一翼を担っていることが特徴です。

コロナ禍のなかで活動を模索

今回のコロナ禍では、これまで積み上げてきた地域での活動を中断せざるを得なくなり、今何ができるか試行錯誤をしています。自宅のできる活動、例えば使用済み切手・ハガキ・ベルマーク・古着・古本などの回収活動を紹介していますが、新たな試みとして、例えばオンラインで高齢者施設や学童クラブと学生とつなぐといった、人と関わる活動ができないか検討しています。学生がどんどん地域に出向いて活動するには時間がかかると思いますので、新たなつながり方を模索している最中です。

VCを通じて学生の成長を実感

学生にとって、ボランティア活動は大学生活で必ず通らなければならぬ道ではありません。しかし、学生が今後の人生を歩むなかで、ボラ

ンティア活動に関わることで学生生活が充実していたと振り返られるよう、常勤のコーディネーターとして、ボランティアの価値を伝え、背中を押していきたいと思います。そして、大学や教職員に対してはVSCの価値が認められるよう、取り組みを進めていきたいと考えています。



援農ボランティア活動



学生自身が企画を検討し活動を進めます



ボランティア活動保険等の補償制度は、社会福祉協議会およびその構成員・会員ならびに社会福祉協議会が運営するボランティア・市民活動センターなどに登録されているボランティア・ボランティアグループ・団体が加入対象です。

災害時の「ボランティア活動保険」について

近年、全国各地で大規模な自然災害が発生し、甚大な被害をもたらしています。被災地の復旧支援についてはボランティアの皆さまの活動によるところが大きく、重要な役割を担っています。

全社協の「ボランティア活動保険」では大規模災害が発生して災害ボランティアセンターが設置され、災害復旧対応のボランティア活動に緊急性がある場合、被災地の道県社会福祉協議会から全国社会福祉協議会への要請に基づいて、「大規模災害特例」を適用し、ボランティアの皆さまが、速やかに復旧支援活動に対応できるよう利便性の向上を図っていますので、その内容についてお知らせします。

大規模災害特例の特長

- ①補償開始・・・通常は加入申込手続きの完了した日の翌日午前0時から補償開始となりますが、大規模災害特例が適用された場合は、社会福祉協議会で加入申込手続きが完了した時点から即時の補償開始となります。
- ②加入申込・・・通常はボランティアの皆さまの最寄りの社会福祉協議会でボランティア活動保険の加入を申込みいただきますが、大規模災害が適用された場合は、被災地の社会福祉協議会(災害ボランティアセンター)でも加入申込が可能となります。

大規模災害時、インターネットによる加入申込を受け付ける場合もあります。「全社協被災地支援・災害ボランティア情報」から募集状況をご参照ください。



<https://www.saigaivc.com/>

天災・地震補償プランをおすすめします!

ボランティア活動保険の「基本プラン」では、ボランティア活動中にケガをした場合に補償されますが、活動中に天災(地震・噴火・津波)が発生してケガをした場合は補償されません。

それに対して「天災・地震補償プラン」では、基本プランの補償範囲に加えて、天災(地震・噴火・津波)によるケガも補償され、より安心して活動していただけることから「天災・地震補償プラン」へのご加入をおすすめします。

※天災(地震・噴火・津波)による賠償責任は対象外になります。

こちらは概要のご案内となります。詳細につきましては「ふくしの保険ホームページ」(<http://www.fukushihoken.co.jp>)をご参照ください。

<取扱代理店>株式会社福祉保険サービス
〒100-0013東京都千代田区豊が岡3-3-2 新霞が関ビル
TEL 03-3581-4667 FAX 03-3581-4763 (受付時間:平日9:30~17:30)

<引受保険会社>損害保険ジャパン株式会社 医療・福祉開発部第二課
〒160-8338 東京都新宿区西新宿1-26-1
TEL 03-3349-5137 (受付時間:平日9:00~17:00)

SJ20-02691 2020/06/05

ボランティア活動保険等についてのお問合せは、株式会社 福祉保険サービスまでどうぞ。

TEL/03-3581-4667 FAX/03-3581-4763 URL <http://www.fukushihoken.co.jp>